

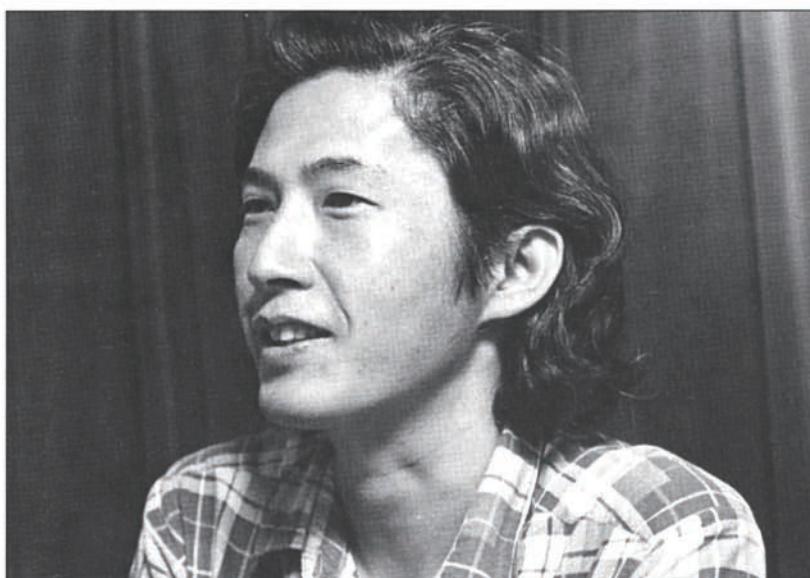
北米インディアン悲詩 付録

内 容

●座談会：時代を映す鏡	1	●19世紀中頃の部族地図	13
●カーティスの映像を読む（一之宮久）	7	●インディアン住民の居住地域/部族名について	14
●北米インディアン史年表/エドワード・カーティス年譜	10	●文献案内	15



イレーヌ・アイアンクラウド氏

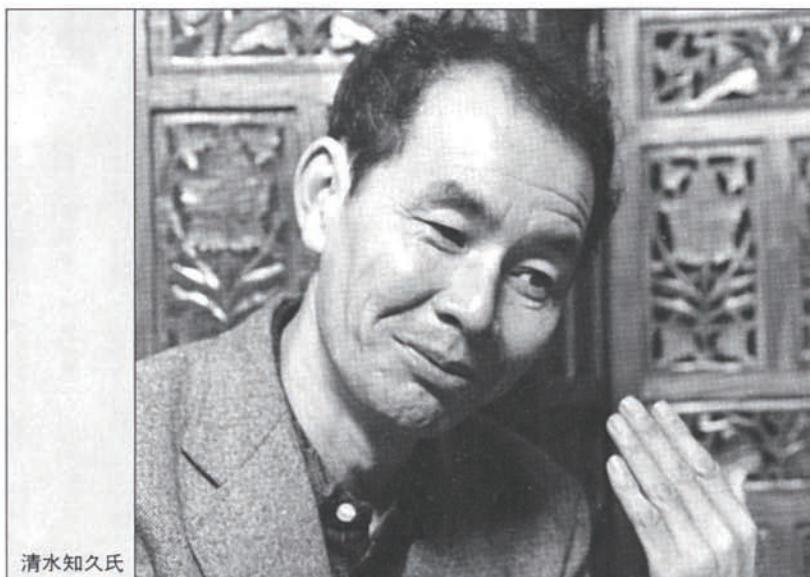


弥永健一氏

●出席 ●イレーヌ・アイアンクラウド／弥永健一／清水知久／富田虎男
■時代を映す鏡 ^{うつ} カーティスの視点をめぐって

●座談会

撮影＝武田 浩吉



清水知久氏



富田虎男氏

『滅びゆくインディアン』の記録者



弥永健一(いやなが・けんいち)

1939年東京に生れる。東京大学理学部数学科卒業。シカゴ大学Ph.D(数学)。現在東京商船大学理学部助教授。J・ナイハルト著『ブラック・エルクは語る』(社会思想社、1977)の訳者。

富田 初めに、この座談会を開くに至つたときさつを私が述べておきます。カーティス

の写真集刊行の話があつた時、私は二人の人をとつさに思い浮かべたわけです。その一人は「ブラック・エルクは語る」の著者ナイハルトで、ご存知のように彼はスー族の聖者の言葉を文章として残しています。もう一人は『古代社会』を書いたモーガンという有名な人類学者で、その見方にはいろいろと問題がありますが、学術上の資料としてインディ

アンの社会組織や生活に関する記録を残しています。

この三人に共通しているのは「このままではインディアンが地上から消え去ってしまうのではないか」という危機感から、写真なり文章なり、資料としてインディアンの生活・文化を記録にとどめたことですね。

カーティスやナイハルトたちが、ほぼ同じ二十世紀前半の時期に、なぜインディアンを記録として残そうと思ったか。また、それから半世紀たつた一九六〇年代から一九七〇年代になつて、なぜ彼らの作品が見直されて復活し、再評価あるいは再批判が起きてきたのか——この辺の問題から話を始めたいと思います。

アイアンクラウド アメリカでこれらの作品が人気を集めた一つの理由としては、アメリカの文化が餓えている、ということでしょう。栄養を求め、自分たちの足元を見たらインディアンの文化があつた。

それと、もう一つ意義深く、しかもとつても簡単な理由があります。それはブラック・

エルクの予言です。「伐られて、ほとんど殺された『聖なる花咲く樹』がまた生き返るまでは三世代かかる」と、そう予言したんです。そして、われわれはその三世代目に当たります。

富田 三世代前には、白人の側から見ると、インディアンは餓えて死んでしまう、バニッシュングだというふうに見ていた。しかし、それは間違いだつた、というわけですね。バニッシングしつつあるインディアンを、白人側で写真なり文章なりでとどめておきたいと考えたのが、カーティスやナイハルトであったのが、カーティスやナイハルトであります。

その記録を残した二人の共通点や違う点を、ナイハルトを訳された弥永さんはどのように思われますか。

物足りない加害者の視点

富田 写真撮影には難しい問題があると思うんです。つまり、人のいやがるものを作り、他人の生活をのぞきこんで写す、ということがないと、いわゆる報道写真はほとんどできない。そのためには、写真を撮らせるだけの信頼関係をつくる努力をカーティスはしているし、それは評価できると思いますね。

「カーティスの生涯」のところに出てきますが、アシニボイン族のブラック・イーグルという九十歳の老人の話があつて、「この男は自分が白人に語るのを一切拒否し、節を曲げることがなかつた。ところが、彼もとうとう自分の部族をこの記録に入れねばならないと思つたのでしよう。違う点は、ナイハルトの著書では、『白人との闘い』が強く出てくる点ですね。カーティスは、当時のインディアンのある側面を、写真として確かに把えています。しかし、『滅びゆくインディアン』というのは、実は白人である自分たちが滅ぼしているんだ、という視点が甘いですね。

清水 たしか原著である二十巻本の第一巻序文でカーティスが書いていますね。「できる限り片寄らない見方で描くつもりである」と。

弥永 そのことはカーティスの写真について、ある程度は評価できると思います。たとえば、ほかの人が写したインディアンの写真を見る

しても、記録する以上は、やはり、白人がインディアンに何をしたか——それがたとえばインディアンの生活なり表情などに、どのよう現れているか、ということが必要でしょう。

弥永 そのことはカーティスの写真について、ある程度は評価できると思います。たとえば、ほかの人が写したインディアンの写真を見るとき、固くなつて佇んで、表情が凍りついていますね。彼の写真では、のびのびしているというか、生きた表情のものが多いでよ。また、インディアンのほうにも、自分たちの姿

で、カスター將軍は白人の罪を背負つて死んだ』等の書物で白人を告発しつづけている、ヴァイン・デロリア・ジュニアが「カーティスの作品はインディアンの現実を写していない」という表現をしていました。その現実の中の一つとして、白人がインディアンに何をしたか、という視線が、ほとんどと言つていよいほどの理由があります。それはブラック・

をなんとか残しておきたいという気持ちもあつたでしょう。

絵画として見る

弥永 パイプを持つて祈っている写真がありますね。とても感じのいい写真で私は好きなのですけれど、これを見て複雑な気持ちになりました。



イレース・アイアンクラウド

1947年ニューヨークに生れる。モンタナ州で北シャイアン族の一員として伝統的に育てられる。サン・ダンサー。AIM(アメリカ・インディアン運動)メンバー。

りました。というのは、その場に自分自身が祈る者として参加するのであれば別ですが、だれにでも見せるかたちで、このような場面を写真にすることは、るべきじゃないと思うんです。しかし、また一方では、この写真を見た人が、ここから何か深いものを汲みとることができるだろう、とも思いますし、そ

真というよりも絵だ」ということです。むしろ「絵画」として考えたほうがいい、と強く思いました。だからデロリアの言うように、これは現実を伝えていないという見方も可能ですし、逆の見方だってできるでしょう。

六〇年代になってアメリカでこれらの写真が評判になり、自分の部屋などに飾ったりする傾向、つまり一種のファッショニズムにならうということは、彼の写真を絵画と考えるならば、理解できます。いま日本の若い人が、自分の部屋に女優のポートレートや、きれいな風景写真や、あるいは街に張つてあるポスターなどを飾るといったファンションと同じよう。この写真を絵画として考えたほうが私は素直に受けとれるのですね。それから先に代表される人々がいなければ、私たちインディアンは『滅びゆく民族』にはならなか

なく、写真家が望む姿に変えて撮る。そういったことが随所に見られますね。

清水 カーティスの写真を見た私の印象は「写



宫廷写真家としてのカーティス

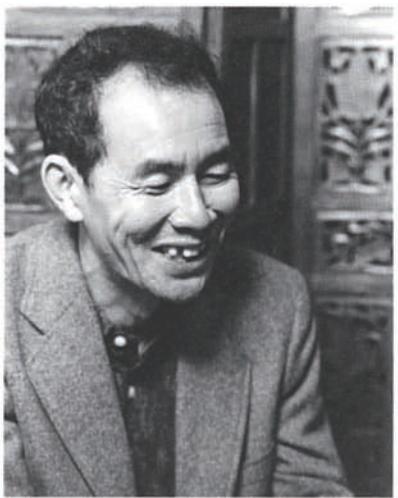
ないと思います。

清水 私は歴史をやっているせいもあって、カーティスの仕事に、当時の大統領であったセオドア・ルーズベルトが援助し序文を書いていること、経済的には、ロックフェラーと並ぶ大資本家のJ·P·モーガンが一〇〇万ドルのお金を出していること——それは、その時代を代表する政治家であり帝国主義者であるルーズベルトと、その口つきで、最大の独占資本家であるモーガンとが援助していると

いう事実に注目したいと思います。これには色々な解釈ができるけれど、私が思い浮かべたのは、ヨーロッパの王侯貴族が多くの画家たちを雇つてさまざまな絵を描かせたこと、つまり宫廷画家たちという存在ですね。ヨーロッパの宫廷画家たちが、王家の人々の肖像を描き、また宗教画や風俗や風景を描いたのと同じで、カーティスは、言葉は適切ではありませんが『宫廷写真家』であるというふうに解釈します。これは、カーティスの側面として見落とせないと私は思うんです。彼は大統領一家の写真も撮っていますし、それが土台となつて援助を受け、より大きな仕事をとしてインディアンを撮影し、その写真集の出版も可能になった。

アイアンクラウド それはおもしろい、興味深い見方ですね。もしルーズベルトやモーガンに代表される人々がいなければ、私たちインディアンは『滅びゆく民族』にはならなかつたはずですからね。

富田 白人は一方で圧迫しながら、一方で記録した……。



清水知久(しみず・ともひさ)

1933年東京に生れる。東京大学教養学部アメリカ科卒業。現在日本女子大学文学部教授。アメリカ現代史専攻。主著『アメリカ帝国』(亜紀書房、1968)、『アメリカ・インディアン』(中公新書、1971)ほか。



アイアンクラウド

写真さえ残せばいい。もう

戦争もできない、力もないインディアン……。それで写真が欲しかった。だから、罪はろぼしといったような……。ある意味では、まさにその時代のアメリカと切り離せない、アメリカの病気そのものだ、ともいえます。

富田 罪はろぼしというよりも、罪の意識がおそらくなかつたでしよう。

清水 罪の意識はないでしようね。ただ、T・ルーズベルトは西部開拓史を自ら書いているほどですから、西部を好きだったんですよ。

そして、すべてのインディアンに対してではないけれども、勇ましく戦つたインディアンには、彼は敬意を払っています。またモーガンにしても、その当時の裕福な人々がそのお金で慈善事業をやっていたように、何かいいことをやつて、といったふうな考え方だと思います。そこに罪はろぼしという思いが、あつたかどうか分かりませんが……。

弥永 この写真が、たとえばアメリカの大企業の応接間や、家庭の居間に飾られるという

いまも息づいているインディアン文化

富田 二〇世紀の前半は、白人の向う側に滅

びゆく民族がいるということで、この写真の

ような記録をとつていた。ところが三世代たつて一九七〇年代になると、白人の側がバニッシングしつつある危機に立たされているのに気がついた。いわば立場が逆転したと思うわけです。それではバニッシングしないようにするにはどうしたらよいのだろうか——そう自覚した一部の人は、インディアンに学ばうと思うようになった。なかには指定居住地に入りこんでインディアンに学ぼうという日本人も出てきているわけです。カーティスとちょうど逆の立場で撮っている写真集も最近出ていますね。

アイアンクラウド この写真、ご存知?



アイアンクラウド カーティスの写真集があつて、ほかにも色々な本があつて、そこでは、たとえ『滅びゆく民』であつても、われわれインディアンは健在なのです。(笑い) 私たちは残りますし、その自信もありますから。

たとえばこの写真を見て、これは歴史だ、もうこれは過去の死んだインディアンの写真だ、というふうに見ないで、ひとつ大きな

んです。

弥永 この写真が、たとえばアメリカの大企

のは、その時点で、アメリカ・インディアンは安全である——そういう考え方だろうと思うんです。実はそうではなかつたというのは、現在のアメリカを見ればよく分かるわけです。文明の行きつく先が見えてきた、大きな円を描いて回帰してきている——それが端的に言えば、核問題ですね。文明の行きつく先に、エネルギーから兵器に至る核問題があつて、それが現代文明の存在 자체をおびやかしているんだ、という事実があります。

流れの中でこの人は生き、また、その流れの中で私たちも生きている——ということです。これは決して死んだ人の写真ではありません。私たちの内で生きている人なのです。



* * *

また次の日も立つて……。結局、彼が言うのは「ぼく、嫌いですか」と。(笑い) そこから話が始まるんですけれど、この写真、彼は恋人を待っているところです。

富田 これはシャイアンですか。

アイアンクラウド そうです。

写真にあらわれた時代性

富田 先ほど「絵として見る」という話がありましたが、カーティスは報道写真としての報道性というものを、意識的に入れようとしていますね。彼が意図したことと、結果として写真に表れたことと、その辺はどうなんでしょうか。

清水 報道ということからこの写真を見て、私がすぐ思い浮かべたのは次のよな連想です。

たとえば、日本のドキュメンタリー番組を見ていますね。夕日が好きなんですね。番組の終わりに必ず画面に夕日が出て、沈んでゆく。そして全部がきれいになつて終わるんです。

別の例でいえば、ダムができる湖底へ沈むさんの表情を撮ったり、わらぶき屋根を撮ったり、あるいは今年で最後となる農作物を収穫する風景を撮る——そういう視線、そういうものの見方を、カーティスの写真から連想したわけです。そこには、むろん慈しみや愛情はありますよ。ただ最終的には、消えゆくもの、減びゆくものは美しい。減ぼす側も含めてすべてがきれいになつて終わるんです。

カメラで記録するという報道写真家の立場にそつて考えてみると、そういう視線は、

一九世紀から二〇世紀初めにかけての、しかも対象がインディアンであつたというカーティスの場合だけではなく、それ以後も今日までずっと続いているのではないか。

アイアンクラウド 私たちは、美しく戦い、美しく生き、美しく死ぬことは確かです。しかし、外側から、私たち以外の人から、私たちインディアンを美化されるのは、いやです。この写真の中には、よくできているものもあります。でも一方で、そういう美化されたものもあるんです。

富田 カーティスは絶対に安全な側、滅びない側から撮っていますね。白人が滅びるとは考えていない——その立場の違いが、はつきり出てくるわけですね。

清水 私はかなり批判的な見方をしていますが、しかし、たとえこの写真が現実を写していなくても、歪んだ記録であつても、記録は残つていったほうがよい、という考えです。中にはお金をもらって被写体になつた人もいれば、逆に記録に残したいと希望した人もいる。写した側と、写された側と、そこにはさまざまなものがありますよ、写された人々は明らかに写真として記録に残っています。

ですから、これらの写真は、後世の白人やインディアンを映す鏡にもなるでしょう。だから私は、これらはある面で眞実を伝えた、と思いますし、また今後も伝え続けるだろうと思います。

カーティスは、何を凝視めていたのか

富田 歴史のほうから言いますと、一八九〇年代から一九一〇年代までの三〇年間は、つ

インディアンの歴史上、最悪の時代だったと言えます。とくに、一八八七年のドーグ法で指定居住地内の土地が個々のインディアンに割当てられ、部族共同体を解体された諸部族はひどかった。土地の共同所有にもとづく生活と文化が破壊された上、白人文化への同化が強制されたためです。しかし、農地のないところに住んでいた部族は、この法の適用をよってまちまちです。ですからカーティスの全二十巻と付録四巻(復刻版)の作品全体を見渡してみると、このような地域の違いに応じて主題が違つていてることにすぐ気がつきます。たとえば大平原や高原地方の写真には、老いたる戦士の肖像や、騎馬や正装の戦士が多い。南西部の砂漠地帯の作品には、水汲みや住居など生活を撮つたものや、女性の肖像が多い。北西海岸からアラスカにかけては、当然のことですが、漁撈の写真が主ですし、カリフォルニアでは編かごが多いといった具合です。そして全体に共通して老人の肖像が多い。土地を耕している写真は一枚もありません。





と伝わるようになります。撮るものと撮られるものと、見るものという三つのものによつて写真は成り立つてゐるわけですね。

富田 一つだけつけ加えておきたいのは、アメリカ人ばかりでなく、我ら日本人も、ハリウッド製西部劇などを通じて、インディアンを『滅びゆく民』と思い込み、あるいは過去の人として葬つてきたのではないか、ということです。

イレースさんのお話をうなづいて、インディ

アイアンクラウド カーティスは、その時代の中で清らかな野蛮人、純粹な野蛮人を撮りたかったに違ひありません。白人と接触した跡とか、生活が変わってきたところを消して……。

清水 そうですね。二十巻本の序文にも「もう少しすれば同化してしまうから」とありますからね。

アイアンクラウド その当時でも、すでに東部の部族はかなり影響を受けていて、風習とか言葉とかが変わってきていましたから。

富田 取材をミシシッピ以西に決めた理由で、ちょうどね。

弥永 カーティスがこの時代の指定居住地とか、あるいは都会でアルコール中毒になつているインディアンまで含めて撮つていれば、それはすごいことだと思うんです。

時代を超えたメッセージ

清水 そうですね。貧しさ、病気、餓えなどがないで、だから絵として美しい。実際にはそういうつたささまざまな困難があつたはずなんですが、それが彼の写真に見えないのは残念な事だと思います。

しかしながら、いくつかのポートレートには私たちの想像力に働きかけてくる深いものがあることもたしかです。じつと眺めていま

すと、時間を超えて訴えかけてくるものがあります。たとえば一人の年老いた女性の写真などから、五十年、六十年の歳月を超えて強く伝わってくるものがあります。対話のできる何枚かのポートレートがあります。そうした写真と対話ををして、写された人、生きた時代に入つていくことができるのではないかですか。

強い喚起力をもつてゐる。写真家としてのカーティスの手腕はその点とてもすぐれている。

弥永 カーティスによる写真についてのコメントの中にも同意できかねるものがあります。しかし、たとえばここにある、朝の太陽に聖なるトウモロコシの粉を捧げてゐる男の写真などを見ると、「大地という母から生まれるものはすべて縁者」という彼らの気持ちがズンズンの意図とはまた違つた何かを語りかけてくるはずです。

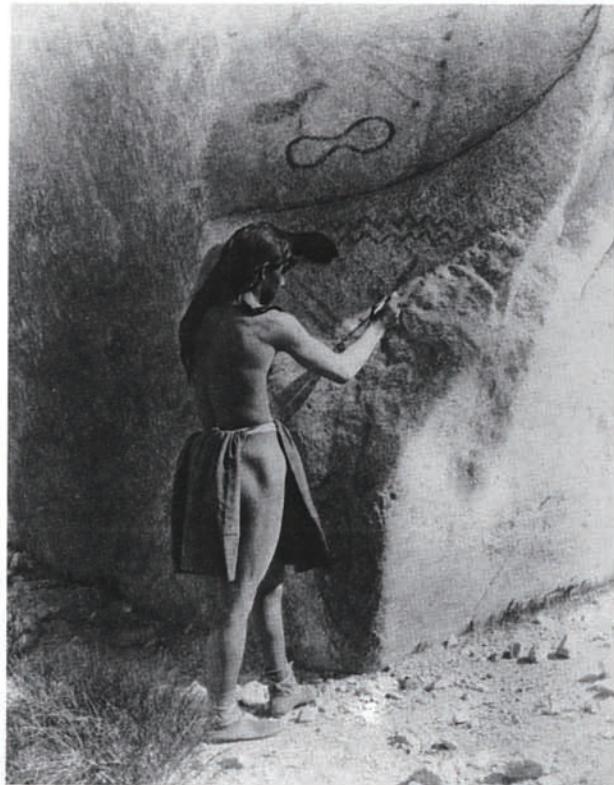
(昭和五八年九月二八日 於・弥永氏宅)

清水 そうですね。貧しさ、病気、餓えなどがないで、だから絵として美しい。実際にはそういうつたささまざまな困難があつたはずなんですが、それが彼の写真に見えないのは残念な事だと思います。



カーティスの映像を読む

一之宮 久(フリーライター・保留地文化)



灰色にかすむ沈黙の世界がある。

モノクロームの映像は、人間が存在する空間にくゆり立つ体臭や熱、あるいは痛みを連想させる生活実感を消し去っている。

それでも何と言葉のむなしさを感じさせる世界であろう。人々は怒り主張し、訴える手段としての言葉を喪失している。ポートレートの視線には、躍動する血肉をもつて内包する人間としての情熱は見られない。穏やかな表情の裏に悲しいまでの諦観がただよっている。肉体の陰影は自然の陰影と同調し、男のひきしまった肩や腕の輪郭は、自然の一部として森や岩が空を分かつ線上に延長されている。すなわち生身の人間が未開社会というタブローにおける單なる素材へと変質しているのだ。

それでも、私が現実に会い食事をし話す現代のインディアンたちは、カーティスの映像の中の群像といかなる脈絡をもちうるのだろうか。現在三七歳の私が、多少なりともカーティスと同時代の空気を吸つたことがあると自体信じられないほどだ。

数葉の写真を手掛りに、時代的脈絡をたしかに把握したと直観する次の瞬間、私はあの密封された真空の世界を彷徨つている自分を発見するのである。私は写真があわせもつ科学性と芸術性に翻弄されているのだ。「時」を超しようとする写真の本質的にもつ普遍性あるいは虚構を、私は執拗に判別しようとしているのである。

シオドア・ルーズベルト大統領はカーティスに次のような手紙を送っている。

「私はあなたの仕事を、現在のアメリカ人がなしうる最も貴重なもの一つだと思っております。——まさに滅びんとするインディアンの生活記録に、あなたは時期を逸することなく着手されました」
(『The World of American Indian』より)。

一九〇五年のことである。

「まだ間に合う」という時代感覚は、インディアン社会の急速なアメリカ化を予測した征服者の見方であり、カーティスの眼は白人の時代的心象を代弁しているといえよう。

蛮族の跳梁した土地に教会が建てられ、文明の灯がともり、野蛮の正体がまったくふつうの人間社会にすぎないことが明らかになつていくとき、「文明人」たちの内なる野蛮や神秘が消滅していくので

ある。キリスト教国家的アメリカ社会を開国以来つき動かしてきた野蛮や辺境に対する聖戦が終わりに近づきつあることへの愛憎の念なのだ。「絶滅した野蛮」はアメリカ合州国発展史における最もロマンチックなエピソードになるはずのものであり、カーティスの映像はかの古きよき時代の証言者としての使命を託されたのである。

カーティスの映像世界はさまざまな角度から解釈できるであろう。写真は完全なる沈黙の世界であるがゆえに最も雄弁なるメッセージであり、情報であり、証拠となりうる。「見る者」の主観をいかようにも喚起する。

まずははじめに意識されなければならないことは、被写体として選ばれた人々とこの映像との関連であろう。現代に生きるインディアーンたちは、いったいカーティスの映像をどのように分析するのであろうか。つまり私は、「先住アメリカ人」の眼を通してこれらの写真に見入っている自分を意識しないわけにはいかない。彼らはその造形的映像の中に、歴史的脈絡を探り出さずにはおかしいだろう。

「われわれにとって白人と邂逅する以前のインディアン社会とは何なのか、西部開拓時代とはいかなる時代であつたのか、インディアンの現代史はいかなる方向に流れつつののか」……と。

カーティスの映像世界は、議論の渦を巻き起こすに値する十分な主題を提供しているように思える。なぜなら悲惨な過去に生きた祖先たちと同じく現在に生きるインディアンたちの周辺にも、カーティス的ロマンティシズムは到底生まれえないほどの苛酷な状況があるからだ。紋切り型のインディアン像を復活させ永続化させるような映画や映像が時代の変遷とともに糾弾されてきたことは、ハリウッド製西部劇の衰退に顕著な例を見た通りである。現在に生きるインディアンたちは、「原始的」で「滅びゆく民」としてのイメージを重荷として背負いながら、それからの脱却をめざしていつまであえぎ続けなければならないのだろうか。

そもそも「滅びゆく民」といわれた人々が現在どのような暮らしをしているのか、それが私の出発点であった。そして私はいま、生きたかいロマンティシズムを一瞬にして冷却させるような、西部開拓時代ながらのインディアンの状況を見つめている。

例えれば——一九八三年現在、アメリカ合州国南西部に住むナヴァ

ホ・インディアンのうち、約九五〇〇人が父祖伝来の地を追われ保留地周辺の白人の町などへ転住させられている現実がある。アリゾナ州北東部において一世紀にわたって展開されてきた「ナヴァホ・ホビ土地論争」の結論であり、二〇世紀最大のインディアンの強制転住(ナヴァホ・タイムズ)といわれている。「母なる大地」と土地を崇める人々に、「金をやるから土地を離れよ」というのだ。

聖なる大地を失うまいとするナヴァホたちは、これまでさまざまな抵抗を試みてきた。一九七九年九月、ビッグ・マウンテン地域では、ナヴァホの老婦人キヤサリン・スマスによる発砲事件が起こっている。羊の放牧地を分断するフェンス(有刺鉄線)を立てにきたBIA(インディアン局)の職員に威嚇発砲したのである。同じ年の一〇月二八日、ビッグ・マウンテン地域はアメリカ合州国からの独立を宣言してしまった。転住者名簿に載せられた人々は、一九八一年から一九八六年までの五年間に、連邦政府の財政的援助をえて転住していくなければならないのだ。早期の転住者には転住資金において有利になるよう配慮されている上、連邦政府の転住資金がいつ枯渇するやもしれないといううわさや個人的疑惑は、次々と新しい転住者を生み出している。

この件に関し、「ナヴァホ・ホビ土地論争委員会」委員長であるパーシー・デイールの言葉に耳を傾けてみよう。アメリカ合州国におけるインディアンの立場を端的に物語る。

「この転住計画はすでに多くのナヴァホを傷つけてきました。アメリカ合州国は正義と自由の国だと言われていますが、私たち先住民にとつてまったくその逆の意味をもつ国でしかありません。私たちは自らの政府からこのような扱いを受けるに値する何をしたというのでしょうか。——この問題は先住アメリカ人がアメリカ合州国からなどのような扱いを受けてきたかの一例にすぎません。そして最悪の例なのです」——(一九八一年三月筆者インタビュー)

ナヴァホ保留地内でも最も伝統を色濃く残しているビッグ・マウントン地方には、いまも電気も水道もない。白人たちの間での生活に危惧を感じる人々は、何とか旧来の文化体系を生かすことのできる未来を展望しようとする。白人たちに土地を奪われ閉じ込められた保留地こそ、彼らが抛つて立つべき最後の大地となつたのだ。

「母なる大地」の思想は、万物の調和を人間存在の第一条件に考え

る社会の思想である。「時」の目盛りのみでは決して測りきれず、有機的で常に内的エネルギーを再生産しようとする凸型の世界である。その意味においてカーテイスが表現しようとした無垢の世界は、発展史観に基いた科学万能主義を標榜する人々、あるいは便利さや効率性のもとに邪魔物は抹殺しても仕方がないと考える社会や人々への啓蒙的映像として見ることができるであろう。そこにこそカーテイスの仕事の今日的意味が読み取れるのではないだろうか。自らの社会や文明を告発する逆説性をもつたカーテイスの映像世界を、私はあらためて見つめなおすのである。



北米インディアン史年表

エドワード・カーテイス年譜

紀元前 二万年以上	モングロイドの一部、アジアからベーリングニアを通って北米大陸へ。
一一二〇〇〇	大動物狩猟民(古インディアン)のクローヴィス(ヤーノ)人活動。
一一〇〇〇〇	(同) フォルサム・プラーノ人の活動、南北アメリカ大陸に拡がる。
一一〇〇〇〇	トウモロコシ、カボチャなどの農耕の発達。
一一〇〇〇〇	メキシコのテワカン盆地に定住農耕村落があらわれる。
一一〇〇〇〇	ミシシッピ川流域にトウモロコシ栽培と土器の使用が拡がる。
一一〇〇〇〇	オハイオ川流域にマウンド(埋葬塚)文化栄える(→後七〇〇年)。
一一〇〇〇〇	南西部地方にモゴヨン文化、ホホカム文化、アナサジ文化栄える(→後一二〇〇年)。
一一〇〇〇〇	ノルマン人レイフ・エリクソン北米北東岸を探険。
一四九二〇	コロンブス、サン・サルバドル島到着。アラワク族に迎えられる。
一四九二〇	フランス人カルティエ、セント・ローレンス川探険。インディアンと毛皮取りを始める。
一五三九〇	デ・ソート、フロリダからミシシッピ川まで探険、先住民の抵抗を受ける。
一五三九〇	コロナード、メキシコから黄金郷を求めて南西部地方に侵入。
一五六〇〇	イギリス、ヴァージニアのジエームズタウンに植民を開始。ポーハタン族と接触。
一五六〇〇	分離派清教徒、プリマス植民地建設。翌春ワムバノアグ族と接触。
一五六二〇	ヴァージニアでポーハタン族の一大蜂起。プリマスでマサチューセッツ族首長四人を謀殺。
一五六三七	ピークオート戦争、ピークオート族六〇〇人惨殺される。女子供は奴隸として西インドへ売却される。
一五六三七	オランダ植民地ニューハムステルダム(後のニューヨーク)でキーフト戦争(→四五五年)。
一五六四三	ヴァージニアでポーハタン族最後の蜂起。
一五六四四	ニューヨーク・ステルダムでピーチ戦争。
一五六四五	ニューヨークランドでメタカムの戦い。ヴァージニアでインディアン撲滅をめぐりベーコンの反乱おこる。
一五六五七	カロライナ植民地で一連の奴隸狩り戦争始まる(→一七一〇年代)。
一五六六〇	イロコイ族、カナダのモントリオールでフランス軍と戦う。
一五六六〇	イロコイ族、英仏に対し中立政策をとる。
一五六六〇	フレンチ・アンド・インディアン戦争始まる(→一六五年)。
一五六七〇	イギリス軍、エロキー族領に侵攻、エロキー軍の勝利。
一五六七〇	デトロイトを中心ポンティアック戦争始まる(→一六五年)。
一五六七〇	イギリス、インディアン監督局を南部と北部に設置。
一五六七〇	カナワ川地方で、ダンモア卿戦争、ポイント・プレザントの戦い。
一五六七〇	アメリカ独立戦争始まる(→一八二三年)。
一五六七〇	アメリカ植民地軍、エロキー族領に四度侵入(→一八一年)。
一五六七〇	ワシントン将軍、サラバーン将軍にイロコイ族掃討作戦を命令。
一五六七〇	北西部諸部族連合軍、合衆国軍を二度にわたって撃退。
一五六七〇	(同) 合衆国軍にフォールン・ティンバーズの戦いで破れる。
一五六七〇	(同) 合衆国とグリーンヴィル条約を締結。
一五六七〇	ティペカヌーの戦いでインディアン軍、ハリソン軍に敗北。
一五六七〇	ショーニー首長テクムシ、イギリス軍と同盟し合衆国軍を破るが、チームズ川の戦いで戦死。
一五六七〇	クリーク戦争。クリーク族の抗戦派、ジャクソン軍の侵攻に抵抗し敗北。
一五六七〇	セミノール戦争。フロリダのセミノール族と逃亡黒人奴隸の連合軍、ジャクソン軍の侵攻に抵抗。

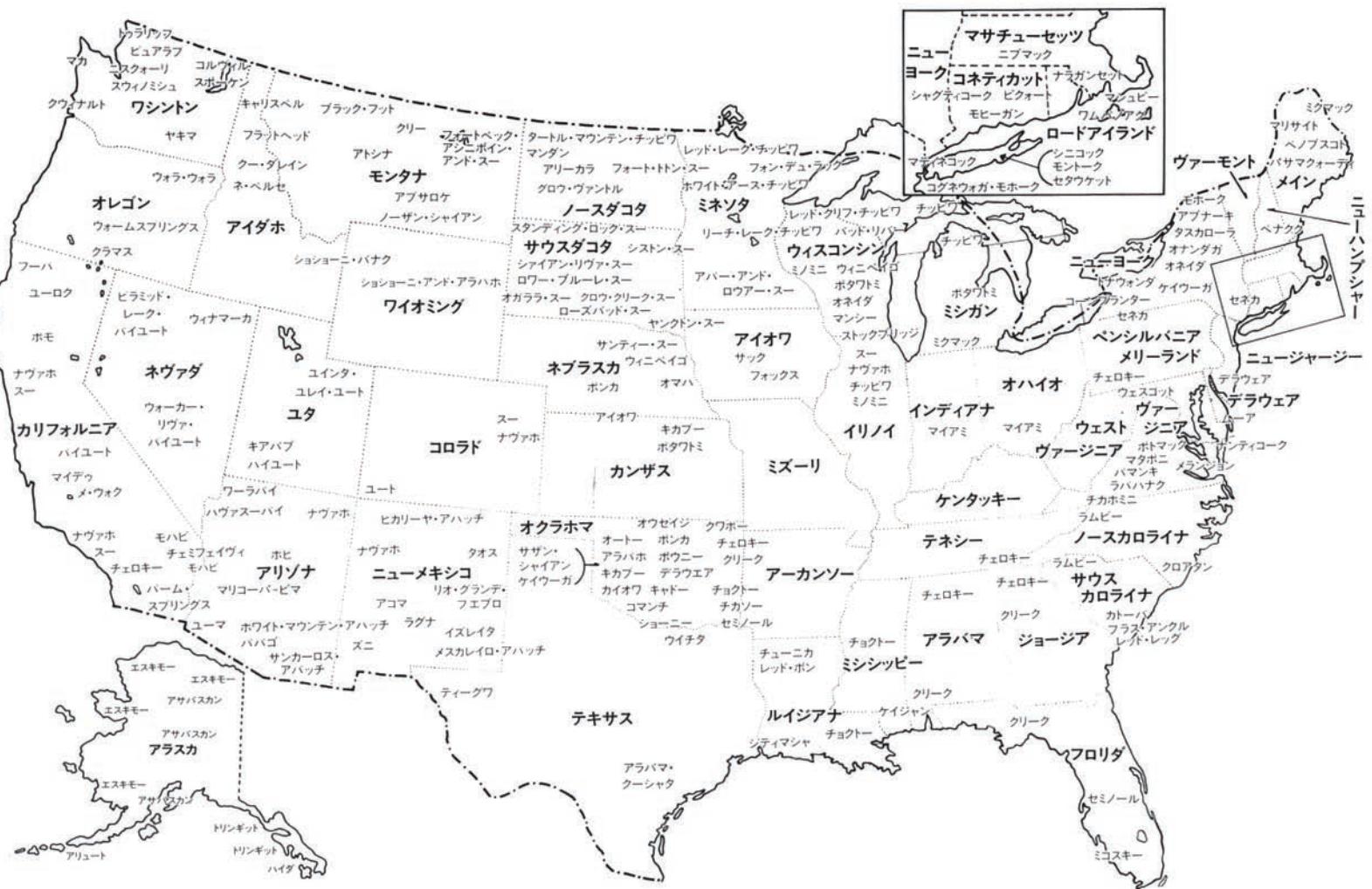
一九〇四年	エ・W・ホッジに協力を要請。T・ルーズベルトの大統領就任式で招待客の一人、ジエロニモを撮影。
一九〇五年	T・ルーズベルトに面会。資金と宣伝の両面に援助が約束される。
一九〇六年	J・P・モーガンに面会。『北美インディアン』刊行資金拠出の約束を得る。
一九〇七年	ナヴァホ族指定居住地でのキャンプに妻クララと三人の子供達をよぶ。『北美インディアン』第一巻発行。フランツ・ボアズが公開審査を要求し、三人の審査官により資料がくまなく調べられるが合格。
一九〇八年	『北米インディアン』絶賛を得る。
一九〇九年	資金繰りと宣伝のため何回かニューヨークへ足を運ぶ。
一九一〇年	ホッジ、スマソニア民族学研究所長に昇任。
一九一一年	資金難克服のため映画『首狩り族の国』を制作・上映。
一九一三年	『北米インディアン』絶賛を得る。
一九一四年	J・P・モーガン死去。援助は継続される。
一九一五年	『昔日のインディアン』発刊。
一九一六年	『首狩り族の国』発刊。前書ともにベストセラーとなる。
一九一七年	『北米インディアン』の発行滞る(〜一年)。
一九二〇年	離婚。財産の多くはクララの所有となる。ロサンゼルスに新スタジオ開設、長女ベスが経営。スチール写真家として映画の下請をする。
一九二一年	第一二巻(ホビ)発行。
一九二二年	オクラホマ、アラスカの撮影。
一九二七年	第二〇巻発行。抑うつの发作に襲われ、二年間病床に伏す。
一九三〇年	『金の誘惑』と名付けた調査プロジェクトを企てるが失敗。
一九四九年	一〇月一九日、ロサンゼルスのベスの家で心臓発作により死去。
一九六〇年代後半	インディアン文化復興の波にのり、カーティスの写真再評価。
一九七五年	カーティスの伝記映画『シャドウ・キヤツチャーチ』(T・C・マクルーハン制作)上映される。
一九七八年	国際インディアン条約会議、国連諮問機関の地位を占める。
一九七八年	連邦議会諸法案に対する抗議『ザ・ロングスト・ウォーク』。

19世紀中頃の部族地図



●本書にあらわれた西部の諸部族を中心に構成
〔 〕内は別称。

インディアン住民の居住地域



(資料：“The New Indians,” by Stan Steiner)

*本書で用いた表記は従来の慣例に従つたが、各部族語によるよび表し方を参考に掲げておく。

部族名について

- ナヴァホ→デイネ(「人々」)
- アパッチ→ディネ(「人々」)
- ピマ→アタム・ア・キムルト(「川の人々」)
- スー→ラコタ(「盟友」)
- アシニボイン→ナコダ(「盟友」)
- アブサロケ(別名クロウ)→アブサロケまたはアブサロカ(「嘴の大きな鳥の子供たち」)
- マンダン→ヌマキキ(「人々」)(1837年以前)
- メトウタハンケ(同部族の古い集落の名に因む)(1837年以降)
- アリーカラ→タニッショ(「人々」)
- アトシナ→ハアニニンまたはアニアニネナ(「白粘土の人々」)?
- ビーギヤン→ピカニ(「鞣しの悪い毛皮」)
- ブラックフット→シクシカウ(「黒い足」)
- シャイアン→ツィスツイスタス(「人々」)
- スペークン→スペークンまたはスパーゲイン(「太陽(の人々)」)?
- ネ・ペルセ→ヌミブまたはニミブ(「人々」)
- ウイシュハム→イラハルイト
- クーテネイ→サンカ(意味不明)
- マカ→クウェネットチエチャト(「岬の人々」)
- クワキートル→クワキートル(「川の北側の浜辺」?)
- クラマス→マクラク(「人々」)
- ホビ→ホビトウ(「平和な者たち」)
- ズニ→アシウイ(「肉体」)
- エスキモー→イヌイトまたはイヌイン(「人々」)

資料：“A Concise Dictionary of Indian Tribes of North America” by Barbara Leitch,
“The Indian Tribes of North America” by John R. Swanton. ほか

北米インディアン悲誌 付録

1984年2月1日 初版発行

監修——富田虎男
資料協力——横須賀孝弘
発行人——毛藤圓彦
発行所——株式会社アボック社出版局
〒247 鎌倉市岩瀬905
印刷——東光印刷株式会社